徳島新聞　平成24年7月25日　朝刊

いじめ行為 どう対処

複数の教員で迅速に

加害者の特性 変える教育を

鳴門教育大学予防教育科学センター 山崎勝之所長に聞く

大津市の中学2年の男子生徒が自殺した問題は、滋賀県警が中学校と市教育委員会を家宅捜索する異例の事態に発展した。市教委が実施したアンケートでは、陰湿ないじめの一端も明るみになった。繰り返されるいじめ行為にどう対処すべきか、鳴門教育大学大学院教授で同大予防教育科学センター所長の山崎勝之さん（発達健康心理学）に聞いた。

（須見千次郎）

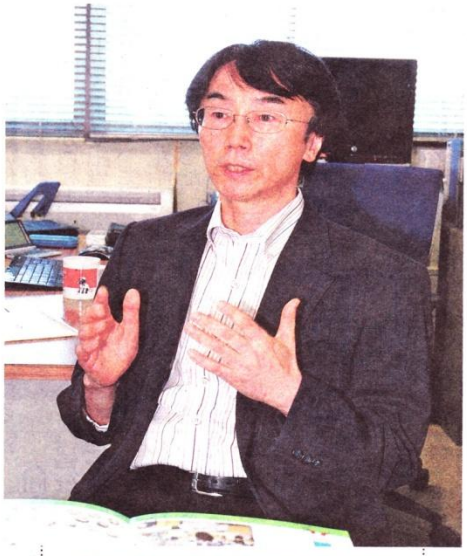
■起きる原因

根強い原因が多様にあると想像できる。加害者、加担者、周りで面白がる強化者、傍観者、教員…といった個人の特性と集団行動が複雑に絡んでいる。

しかし何と言っても、加害者個人の特性に焦点を当てる必要がある。性格、認知、感情、行動、思考など全てにわたっていじめに入るゆがみがある。

「幸福な加害」という心理学的な現象がある。誰かを加害し、その人が困ることに喜びを感じること。幼児期や児童期前半に顕著になり、児童期後半に抑制されるが、後々まで残る。

特性の形成過程は幼少期にある場合が多い。「おなかがすいた」「おしめがぬれて気持ち悪い」という基本的欲求が生じた際に、親からすぐに対応されなかったり、その欲求を絶つための身体的暴力や言葉などの攻撃的行動を受けたりしている。また、攻撃的行動を使って目的を達成する親の姿を見て学習してしまう。



「真の解決は学校での予防教育によるしかない」と話す山崎さん＝鳴門教育大学

■いじめを止める

基本として強調しておきたいのは、いじめについての知識を高めること。いじめの加害、被害とはどういうことなのか、子どもや教員がしっかり理解し、「いじめは絶対に許さない」という学校、クラス、教職員の態度や雰囲気の形成を怠ってはいけない。

いじめは誰にとっても迅速、正確にとらえにくい。しかし「必ず見つかる。見つけなければならない」と心に留める。教員にとっては、普段の授業をするよりも重要な仕事だ。

■学校レベルの対策

子どもは直接助けを求めようとしない。求められるのを待っていてはだめ。命に関わる問題だ。いじめが起こったときに時間を置かずに止めるには、学校レベルでの対策が重要。校長の強いリーダーシップの下、教員が共同で迅速に動くシステムが必要で、いじめに対する厳格な態度を恒常化しなければならない。

個人の教員に任せると危険な状況を生むのでクラス担任だけに委ねず、互いに監視し情報伝達するなどのシステムをつくり、必ず複数の教員がチームを編成して進める。教員は「いじめ被害の最高の救済者たる」という気概を持ち、いじめを許さない強い意志がなければ無力になる。

■クラスレベルの対応

学校全体が当該クラスをモニターし、管理する意識を高めてほしい。正義感が強く被害者の擁護者となる子どもや、人気のある子どもの役割を強調するなど、クラスのメンバーの力動的関係を修復すると、時間を置かずにいじめは止まる。また、司法警察力が必要ないじめもあり、地域を含めて包括的にアプローチしなければならない。

■予防する

システムが機能すれば、いじめは短時間で止めることができるが、加害者、加担者の心のゆがみには踏み込めない。その子どもが違う環境へ行けば、またいじめをする。真の解決は、加害者の特性を変えること。学校での予防教育によるしかない。

いじめの予防はいじめ問題だけを想定していては効果が薄く、包括性がない。学業よりも心身の健康や学校への適応が大切で、子どもの特性を総合的に扱う予防教育が必要だ。心身の健康や学校への適応が学業の向上も保証するという近年の研究データを知ってほしい。学校教育にとって何が大切か、もう一度考える段階にきている。